

甦る、村橋久成

北に夢を追ったサムライは、何を思い流浪の人となったのか。

開拓使に身を置き、開拓使麦酒醸造所(現在のサッポロビール)設立に力を尽くした官吏、村橋久成(むらはし・ひさなり)。しかし明治 14 年(1881)に開拓使を辞して以降、明治 25 年(1892)に神戸の路上で出处不明の客死者として現れるまでの後半生は謎に満ちたものでした。

中西出版は、村橋久成の生涯を描いた小説『残響』を著した田中和夫氏との縁で、「北海道久成会」の活動に協力しています。



開拓権少書記官の頃の
村橋久成

北海道産業の礎を築いた薩摩人

平成 17 年(2005)9 月 23 日、北海道知事公館前庭において、開拓使ビールの産みの親として知られる村橋久成の胸像の除幕式が執り行われた。

一般にはあまり知られていないが、村橋の業績は麦酒醸造所(サッポロビールの前身)建設にとどまらず、琴似屯田兵村・七重勸業試験場・葡萄酒醸造所・製糸所・鶏卵孵化場・仮博物館・牧羊場などを創設し、北海道産業の基礎を築くという特筆すべきものだった。



除幕式の様子

昭和 57 年(1982)、作家・田中和夫氏による小説『残響』の北海道新聞文学賞受賞をきっかけに、村橋久成の名は再び人々の知るところとなり、それに触発された日本芸術院会員の彫刻家・中村晋也氏による胸像「残響」が誕生した。

平成 11 年(1999)に北海道久成会が発足し、地道な活動が続いていたが、平成 15 年(2003)7 月の高橋はるみ知事の道政執行方針演説の中に村橋久成の功績が取り上げられたことを契機に、翌年“胸像「残響」札幌建立期成会”が結成され、前述の除幕式へと結実した。

二つの「残響」に導かれ、世紀を超えて再び歴史に登場した村橋久成の生涯と、現在に至るまでの道程をこのコーナーで辿ってみたい。

【目次】

- | | | |
|------------|----------------|---------------|
| 1. 小説『残響』 | 2. 胸像「残響」 | 3. 薩摩藩派遣英国留学生 |
| 4. 軍監 村橋直衛 | 5. 開拓使麦酒醸造所 | 6. 放浪、そして死 |
| 7. 村橋久成年譜 | 8. 薩摩藩英国留学生記念館 | |

1. 小説『残響』

作家 田中和夫氏による小説『残響』の文学賞受賞が、
村橋を現代に再登場させるきっかけとなった。

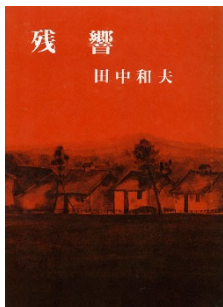
村橋久成との出会い —— 小説『残響』作者 田中和夫

市立札幌図書館が時計台内にあった昭和 37、8 年ころだったと思う。閲覧用の書架にあった北海道史人名辞典が目に入った。取り出して頁をめくっているうちに、「村橋久成」のところで私の目が止まった。

「官吏。初め昇介と称し、のち直衛と改めた。鹿児島県士族でー」で始まる記述は、村橋久成の開拓使における官職と業績を簡略に挙げたものだった。だが、終わりの「在官中専ら勸業課事務を掌理した。退官後は頗る失意の日を送り、帰国の途中病のため死んだ」とあるのが気になった。

開拓使の長官黒田清隆は村橋と同じ鹿児島県士族だが、なんらかの意見の対立のようなものがあって職を奪われ、北海道から追われたのではないか。専横を振る舞った黒田ならやりかねない、と思った。

これが私と村橋久成との出会いであり、のめり込む始まりだった。



1982 年自費出版

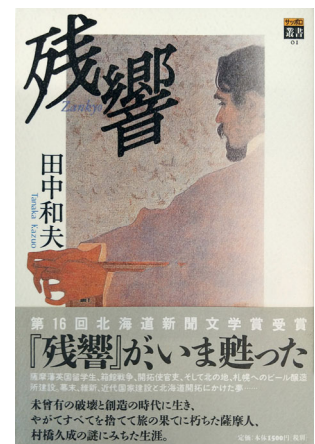
調べるごとに七重勸業試験場、琴似屯田兵村、麦酒醸造所、葡萄酒醸造所、製糸所、仮博物場、農業仮博覧会、牧羊場の創設など、村橋関わった事業の多さに驚くとともに、それらが北海道の産業の礎になっていることを知らされた。しかも、製品の海外輸出を図るなど、彼の視野は日本を超えて世界にまで広がっていた。

一昨年(1997)の 7 月、高橋はるみ知事が定例の道議会で、道政執行方針演説に村橋久成の功績を引用し、「この果敢な挑戦は、今日の北海道産業の礎となって開花した」と讃えられた。

これが引金となって埋もれていた功績が多くの人に知られ、鹿児島の美術館に収蔵されたままの胸像建立運動が始まった。

それから 2 年。多くの方々の賛同・協力を得て運動が結実し、こうして顕彰碑ともいべき胸像が建立されることになった。青春の血を燃えたぎらせ、夢を追い求めた札幌のこの地に、である。建立場所は北海道知事公館前庭。ここはかつての桑園で、近くには養蚕室や蚕業教習場があり、勸業事業所管の村橋とは深い関わりがあった。それだけに、志なかばで北海道から去った村橋久成の、北海道への思いを込めた残響が 124 年の時を超えてこの地に届いた、と感じ入ったほどだった。

村橋久成はいま、北の大地によりみがえった。不屈な闘魂を秘めた目の輝き、風に向かって髪をなびかせた躍動感あふれるダイナミックなフォルムの胸像は、日本彫刻界の重鎮中村晋也氏制作によるものだが、



1998 年 7 月
北海道出版企画センター刊

これはまさに村橋久成の在りし日の姿である。

胸像建立に心温まるご支援をくださった方々に、心の奥底からお礼を申し上げたい。

(2005 年 9 月 23 日、村橋久成胸像「残響」建立記念誌より)

田中 和夫 (たなか・かずお)



1933 年北海道江別市生まれ。江別高校卒業。1952 年国鉄就職。1987 年札幌車掌区車掌長で国鉄退職。1971 年小説『トンネルの中』で第 23 回国鉄文芸年度賞。1982 年小説『残響』で第 16 回北海道新聞文学賞。1983 年国鉄加賀山賞。1988 年北海道文化奨励賞。

現在北海道鉄道文学会幹事、北海道文学館評議員、札幌文学編集人、鉄道林発行人。

主な著書に『残響』、『物語サッポロビール』、『北海道の鉄道』、『幻の木製戦闘機キ 106』、『車掌の仕事』(以上、いずれも北海道新聞社刊)。

※プロフィールは 2009 年 10 月刊『車掌の仕事』より抜粋したものです。

2. 胸像「残響」

2007 年度文化勲章受章者 彫刻家 中村晋也氏が、
魂を込めて制作した胸像「残響」が北の大地に甦った。

輝く日に勝負を挑んで —— 彫刻家 中村晋也（文化功労者 日本芸術院会員）

私が初めて北海道を旅したのは、今から 20 年ほど前のことだった。白樺の、何ともいえない木肌の色合いに私はすっかり魅せられた。凜として立つその姿に、この地で溢れるほどの情熱を燃焼した村橋の姿が重なった。

当時の私は、「若き薩摩の群像」を制作中だった。これは、江戸末期に薩摩からイギリスへ密航して、先進諸国の文化を学び、日本の近代化に貢献した 17 人の若き薩摩人の留学生の群像である。むろんその一行の中に村橋久成もいた。イギリスで撮られた彼らの集合写真は、制作のための貴重な参考資料だった。皆、フロックコート姿がよく似合った。青年村橋もまたしかり。

その後、北海道大学の図書館で村橋久成の写真が発見された。その写真は、爛々と輝く大きな目をした決意に満ちた男の顔だった。北海道開拓に全身全霊をかけた村橋の生き様がそのまま写し出されていた。凄い。参った。私は一瞬にしてこの写真に惹きつけられ、これを制作したいと強く思った。感動さめやらぬうちに、鹿児島のアトリエで制作が始まった。極寒の地で凜然として生きる男の力強さと、その目の輝きが勝負だと思った。私は写真を食い入るように見つめ、写真の中の村橋の目と格闘しながら制作を進めた。なかなかいい勝負だった。

田中和夫著『残響』と出会ったのもこの頃だった。そして村橋を慕う多くの方々とも出会った。胸像の題名「残響」はその本からいただいた。本の中の村橋も、デリカシーと芯の強さを併せ持った清廉潔白な人物像が描かれていた。村橋の生き様は今でも人々を魅了し続けている。

この度、ご縁をいただき、この胸像が北海道に建てられることになった。聞けば、札幌の知事公館前庭とのこと。村橋さん、よかったね。近代日本の曙の頃、あれほど愛し、あれほど情熱を傾けたこの地の人々が、また呼び戻してくれた。札幌の人々は長い間、この日が来るのを、あれからずっと待っていたにちがいない。本当によかった。

私も一枚の写真に出会って、このような感動的な歴史的一幕に参加させていただけることに感謝している。

（2005 年 9 月 23 日、村橋久成胸像「残響」建立記念誌より）



村橋久成胸像「残響」

中村晋也（なかむら・しんや）



三重県亀山市出身。東京高等師範学校卒。1949 年鹿児島大学講師、1966 年フランス留学、1972 年鹿児島大教授。1982 年「若き薩摩の群像」建立。1984 年日展文部大臣賞受賞、1988 年日本芸術院賞受賞、1989 年日本芸術院会員、1992 年鹿児島大学退官、名誉教授。

1994 年日本彫刻会理事長、1996 年中村晋也美術館設立。1999 年崇城大学副学長、芸術学部長。勲三等旭日中綬章受章。2002 年紺綬褒章受章、文化功労者、2007 年文化勲章受章。

筑波大学名誉博士。日展顧問。

※プロフィールは 2022 年 1 月に Wikipedia より抜粋したものです。



銘板について…北海道を代表する書家、中野北溟氏の作。

中野氏は 2009 年に旭日小綬章を受章した。

3. 薩摩藩派遣英国留学生

薩摩藩は村橋を含む 15 人の留学生と 4 人の使節を密かに英国に送り込んだ。慶応元年(1865)、久成 22 歳の時だった。

留学で藩意識と国家意識の葛藤が生まれる

村橋が最初に歴史の舞台に登場するのは慶応元年(1865)、22 歳の時のことだった。薩摩藩は村橋を含む 15 人の留学生と 4 人の使節を密かにイギリスに送り込んだ。

これは、藩主・島津斉彬の発案によるもので、彼は「西欧の近代的な技術を学び、豊かな強い国をつくらなければ、いずれ日本は列強に支配され、植民地化の道を辿らざるを得ない」と考えていた。留学生の派遣は打開に向けた一つの布石だった。この構想は安政 5 年(1858)斉彬の急死により一旦頓挫したが、7 年の時を経て五代才助(友厚)の建言によって、遂に実現されることになる。

文久 3 年(1863)の薩英戦争に参戦し捕虜となった経験から学んだ五代は、長崎で英国商人トマス・グラバーと懇意になり、海外情報を得ながら開明理論を構築していった。そして前述の「五代才助上申書」となる。この内容は、数字に裏打ちされた「上海貿易論」と「海外留学生派遣論」を軸に展開される「開国貿易を基礎とした富国强兵論」(犬塚孝明著『薩摩藩英国留学生』)である。

イギリス人たちに「サツマ・スチューデント」と呼ばれた 15 名の留学生のうち、門閥から選ばれた若者の一人が、村橋久成だった。

鎖国下の幕末の海外留学——イギリスへの出国は国禁をおかしての密航である。幕府の目をくらすために、全員が変名で呼び合い、琉球出張の名目で鹿児島を発ったのは慶応元年 1 月であった。2 ヶ月後、グラバー商会のオースタライエン号に乗船し、羽島浦を発った。

留学生たちは、大英帝国が繁栄をきわめたビクトリア王朝時代のイギリスを目の当たりにした。「世界の工場」といわれた近代産業と、市民が選挙権を持つ社会がそこにはあった。ロンドン人口 300 万人を超える世界の近代都市であり、14 年前にすでに第 1 回万国博覧会が開かれ、大量の鉄とガラスでつくられた巨大な建物が世界を驚嘆させた。街路にはガス灯がとまり、地下鉄が走る近代都市であった。

ロンドン大学に学び、初めて見る西洋文明に、村橋は激しいカルチャーショックを受けた。それは、35 年後の明治 33 年(1900)、ロンドンに留学中の夏目漱石が陥ったノイローゼもしくは鬱状態に似たものだった。あまりにも巨大で異質な文明にうちひしがれたといえる。

当初 2 年間で予定していた留学を打ち切り、出国の翌年、村橋は帰国した。



洋装の留学生たち。後列左から2人目が村橋

15 人の留学生たち

■留学生たち

氏名	年齢	役職	後の氏名	帰国後の官職
町田 民部	27	大目付、薩摩藩開成所掛学頭	町田 久成	帝国博物館初代館長
村橋 直衛	22	御小姓組番頭	村橋 久成	北海道開拓使書記官
畠山丈之助	22	当番頭	畠山 義成	初代東京大学校長
名越 平馬	17	当番頭	名越 時成	戊辰戦争従軍後は不明
市来勘十郎	23	開成所第一等諸生	松村 淳蔵	海軍兵学校校長
中村 宗晃	22	蘭医ボードウィン門下生	中村 博愛	外交官、貴族院議員
田中 静洲	21	開成所句読師	朝倉 盛明	語学教師、生野鉾山局長
鮫島 誠蔵	20	開成所訓導師	鮫島 尚信	外交官
吉田 巳二	20	開成所第三等諸生	吉田 清成	外交官
森 金之丞	17	開成所第二等諸生	森 有礼	初代文部大臣
東郷愛之進	23	開成所第三等諸生	東郷愛之進	戊辰戦争に従軍、戦死
町田 実積	17	開成所諸生	町田申四郎	小松帯刀の養子になるが、その後不明
町田清次郎	14	開成所諸生	町田 清蔵	財部家に養子入り、「財部実行回顧談」を残す
磯永 彦輔	13	開成所第三等諸生	長沢 鼎	アメリカ移住、「葡萄王」となる
高見 弥一	21	開成所第三等諸生	高見 弥一	明治政府に出仕、後に鹿児島で算術教員



(後列左から)
高見弥一・村橋久成・東郷愛之進・名越時成
(前列左から)
畠山義成・森有礼・松村淳蔵・中村博愛

■随行した 4 人の外交使節

氏名	年齢	役職	後の氏名	帰国後の官職
新納 刑部	32	大目付、薩摩伊佐郡大口領主	新納 久脩	薩摩藩家老
松木 弘安	32	御船奉行	寺島 宗則	外務大臣など
五代 才助	29	御船奉行	五代 友厚	大阪商工会議所初代会頭
堀 壮十郎	19	長崎通詞	堀 孝之	帰国後は五代の事業を助ける



(後列左から)
朝倉盛明・町田申四郎・鮫島尚信・寺島宗則・吉田清成
(前列左から)
町田清蔵・町田久成・長沢鼎

4. 軍監 村橋直衛

木原直彦氏(北海道立文学館 名誉館長、
村橋久成胸像建立期成会 会長)の寄稿より

「大黒屋光太夫」や「落日の宴」など確固とした歴史小説を紡ぎつづけている吉村昭さんの存在は、大きくて重い。その御本人が言われるように、「黒嵐」「赤い人」「間宮林蔵」などの本道の歴史事件に取材した作品を多く持つ“北志向”の作家でもある。

平成12年に刊行した「夜明けの雷鳴－医師高松凌雲」(文藝春秋刊＝文春文庫)もその一つだ。「幕府軍艦『回天』始末」(文春文庫)を書いたとき気になった人物であると述懐しているが、近代医療に博愛と道義を貫いたことで知られる。徳川昭武(15代将軍徳川慶喜弟)の随員としてパリに赴いて近代医学(その精神)を学んで帰国した彼は、恩義に殉じ旧幕臣として箱館戦争に参加する。その折、壮絶な戦場のなかで敵味方の区別なく治療を行ったのだが、数多い箱館戦争もののうち凌雲を主人公に据えた長篇小説は「夜明けの雷鳴」のほかにはない。

徹底して資料を渉猟するなかで構築したその史観は定評のあるところだが、この小説のなかに村橋久成が重要な人物の一人として登場するので紹介したい。その出会いは感動を呼ぶ。

時は箱館戦争のさ中、凌雲は病院頭取医師取締として箱館病院の全権をまかされていた。戦いが激化し多くの負傷者が運ばれてきたなかに敵兵もいて、「戦死した者の仇だ。殺す」と刀に手をかける者もいる。凌雲はパリの“神の館”という医学校兼病院で学んだことをふまえ、「富める者にも貧しい者にも同じ治療をほどこし」「敵方の傷病者も味方の傷病者同様、ねんごろに施療する」と信念を貫く。

間もなく久留米・薩摩両藩兵がなだれ込んできて「斬れ、撃て、なにを容赦している」と殺気だって叫ぶ。凌雲は主張をつづけながら、死を覚悟した。そのとき一方の旗頭のような男が「貴殿の言われることはよくわかった。傷病者は必ず救命する」とのべた。薩州隊の山下喜次郎である。凌雲は膝がくず折れそうな感じがしたが、分院において松前・津軽両藩兵によって十数名の傷病者が斬殺されただけに、あらためて山下が得がたい存在におもえた。

夜が更けて、薩州隊軍監村橋直衛、藩士池田次郎兵衛と名乗る二人が面会を求めてきた。山下から聞いたが、知り合いである入院者の会津藩遊撃隊長諏訪常吉殿に頼みたいことがあると言う。村橋は現在の情勢を述べ、大勢は決した、官軍はいたずらに殺傷は好まぬ、ゆえに榎本軍に和平の斡旋の労をとって欲しい、というのだ。だが、諏訪は重傷でその任に耐えない。ならば、と村橋は、貴殿にこの任をお引受けいただきたいと言った。

榎本総裁らにとって降伏は最大の屈辱であろうと思う凌雲は、強く断わりつづけた。しかし村橋は「和平を斡旋していただくのに、最もふさわしいお方と存ずる」とくい下がる。論の立つ男だ、と凌雲は胸の中でつぶやき、戦闘がつづけば大量の死傷者が出るのはまちがいないし、「和議が成った後、榎本総裁をはじめ首脳部の方々を温く遇すると言われたが、それが事実ならお引受けすべきと存じます」

以下、凌雲らが榎本らを相手に息づまるような交渉が描かれているが、講和のため大役を果たしたのだった。そのなかで、村橋が端正な態度を取りつづけている姿が印象的である。明治 2 年 5 月 18 日、五稜郭の榎本軍は全員降伏した。

凌雲が貧民救済のため同愛社を創立したのは明治 12 年であったが、それから 30 年後に乞われて史談会で箱館戦争の体験を語って感銘を与えた。このとき寺師宗徳と名乗る男に、村橋と池田のことをご存知か、と聞かれた。凌雲は即座に「知っているどころか、私には恩人です」と答えた。凌雲はさっそく元海軍大佐である池田の侘び住いを尋ね、二人はうわずった声で再会を喜び合う。村橋のことを聞くと、池田は悲しげな色を浮かべながら、明治 25 年 10 月の日本新聞をひろげた。そこに「村橋久成の末路」という長文の記事がのっていて、村橋が並々ならぬ人物であることをはじめて知る。「行路死亡人」の活字を眼にして「体格が逞しく、鼻梁の秀でた男らしい風貌の村橋の姿が思い起された。高官にまでなった村橋が、なぜ官を捨てて雲水に身をやつして行方を断ったのか」

池田は深く息をつくと「その新聞記事を見た時には、眼を疑いました。村橋殿の諱が久成と知っておりましたので……名家の出らしく気品があり、それでいて豪胆でした。思慮深い方でありましたから、なにか思うところがあってさすらいの旅に出られたのでしょうか」

凌雲は帰りの人力車のなかで、村橋はなぜ野垂れ死にのような死に方をしたのだろう。軍監として市中巡回の折におびたらしい死体を眼にし「生れ育ちが良いだけにその折の記憶が年を追うごとに増幅し、人間の生命の儚さ、世の無常が胸にせまり、官を捨て飄然と家を出たのではあるまいか」

読後、高義な二人の交わりに感銘を覚える。それは運命的な出会といっている。

(2005 年 9 月 23 日、村橋久成胸像「残響」建立記念誌より)

木原 直彦 (きはら・なおひこ)



1930 年胆振支庁管内厚真町上厚真で生まれる。1966 年北海道文学展実行委員会事務局長、1967 年北海道文学館事務局長、のち館長。1995 年に財団法人北海道文学館副理事長と北海道立文学館館長を兼ねる。現在は同財団顧問と同館名誉館長、日本文藝家協会会員、オホーツク文学館顧問、NPO 法人さっぽろ時計台の会会長、札幌市民憲章推進会議議長など。

1965 年北海道文化奨励賞、1975 年北海道新聞文学賞・札幌市民文化奨励賞、2002 年北海道文化賞、2004 年北海道新聞文化賞、2006 年地域文化功労賞(文部科学大臣)、2012 年北海道功労賞を受賞。

※プロフィールは 2009 年 6 月刊『北海道文学の聲音』より抜粋したものです。

5. 開拓使麦酒釀造所

麦とホップを製すれば
ビールとゆふ酒になる

「麦酒醸造所は北海道に建設すべき」という稟議書を提出

村橋は箱館戦争後、北海道開拓使に出仕を命ぜられ、東京官園担当として東京出張所在勤となった。やがて函館郊外の七重にある、東京官園直轄の七重開墾場で勤業試験場づくりを始める。更に屯田兵村建設という新たな任務が加わり、琴似を兵村地に定め兵屋建設のための地割りをする。

琴似兵村の建設が進み、七重開墾場の全地測量もひとまず目処の付いた明治 8 年(1875)2 月、村橋は東京出張所に呼び戻された。当時東京官園内に麦酒醸造所を建設する計画が持ち上がり、その建設・事業責任者に任命されるためである。

醸造人は、ドイツ駐在の青木公使から推挙された中川清兵衛である。ドイツでビールの醸造技術を習得してきた中川と、留学先のイギリスでビールを知り、そして近代産業のあり方を体験してきた村橋の運命的な出会いであった。このとき中川は28歳、村橋は33歳であった。



中川清兵衛

村橋は中川に指示をし建設プランを練っていったが、「醸造所の建設地を東京官園とし、試験栽培をして成功の目処がたってから北海道に移す」という開拓使の考えに疑問を持った。

その年の12月、麦酒醸造所の建設予定地の変更を村橋は上申した。

[illegible]

大意

「さきごろよりビール製造のため、醸造人の中川清兵衛を雇い入れ、製造場所や醸造器械などを調べ、別紙の通り図面でもでき、建設費も見積もった。ただし、これは試験のため東京に建設するというための見積もりである。しかし、北海道には建設用の木材も豊富であり、気候もビール醸造にふさわしく、低温を得るために必要な冰雪もまた十分に有るので、最初から実地へ建設したほうが移設・再建の出費を省き、非常に経済的であると考え。については来春から北海道へ建設することとしたい。建設地については、水利や運送、気温などビール醸造に適応する地域があるのを知っている。どうか評議のうえ、至急、指令を下されるように」

村橋の提言は認められた。開拓使の最高決定機関である上局の決議事項を変更することは異例なことであった。日本のビール産業の生みの親として、村橋の果たした最大の功績がこの建設予定地を札幌に変更させたことであると言われている。

もし、醸造所が東京に建設されていたなら、開拓使ビールは数年のうちに跡形もなく消滅していたか、製法を根本から変えなければならなくなったに違いないと思われるからだ。いずれにせよ、日本のビール産業の成立を大きく遅らせることになったはずである。

開拓使札幌麦酒醸造所開業式

村橋は麦酒醸造にだけ係わっていたわけではない。同じ頃、葡萄酒醸造所と製糸所建設の指令も受けている。葡萄を東京官園で試植したのち札幌へ移したのも、養蚕を授産の主要な柱に奨励したのも村橋であった。

外国への輸出を構想しながら勸業、勸農に主眼をおくという村橋を、東京出張所の上局が評価せざるを得ないのは当然であった。

明治9年(1876)5月、村橋に率いられた麦酒醸造所、葡萄酒醸造所建設担当の13名、製糸所器械据え付け担当の14名、大麦栽培担当の清国人農夫9名を乗せた開拓使官用船玄武丸は、横浜港から一路小樽をめざし北上した。

村橋の計画では札幌本庁の正面から東へ伸びる雁木通り沿いの南側一帯を確保し、製糸所、麦酒醸造所、葡萄酒醸造所の順に配置を予定した。製糸所の近くには養蚕所をおき、麦酒醸造所の予定地内にはフシコサッポロ川の水源がある。これは茨戸で石狩川に合流し諸物の搬出入に便利であり、茨戸から小樽までも近い。製品の冷蔵保存や輸送用の氷は近くの豊平川から容易に得ることができるという立地である。

秋の麦の収穫期前までの完成をめざして6月に着工された醸造所の建物は、8月中にほぼ完成した。

ちょうどこの頃、天皇特命の巡視代覧として太政大臣・三条実美、参議の山県有朋、伊藤博文、寺島宗則、元老院幹事の陸奥宗光が視察に訪れた。

醸造器械の据え付けを終えて麦酒醸造所が竣工したのは9月8日で、開業式直前の21日には最初の実麦が仕込まれた。「醸造着手」の稟議無しの見切り発車であった。

9月23日、製糸所において麦酒醸造所、葡萄酒醸造所、製糸所の合同開業式が挙行された。この後それぞれの場所で記念撮影したものが右の写真である。麦酒醸造所の横に積み上げられたビール樽に白い塗料で大きく文字が書かれていた。



開拓使麦酒醸造所開業式

「麦とホップを製すれば(連者)ビールとゆふ酒になる」

誰が書かせたのかは分からないが、立派なビールの宣伝コピーとなっている。

ビール醸造の開始―開拓使麦酒は美味であった。

醸造所の完成と最初の仕込みを見届け、村橋が東京出張所に戻ったのが11月だった。これからの村橋の重要な仕事は札幌から届く製品の受入れと販売の体制づくりであるが、次々と問題が起こる。

中川清兵衛らの待遇も含めた雇用継続問題、ドイツから取り寄せた酵母の不良による醸造の遅れ、別ルートでの買い入れの交渉、またビール瓶の確保や輸送時の品質保持の体制等である。

同じ時期、世情は西日本を中心に騒然としていた。熊本での神風連の騒乱に始まり、福岡・秋月の乱、山口・萩の乱、東京・思案橋事件など政府の施策に反対する不平士族の反乱が起こっていた。

そんな落ち着かない状況の中、村橋の奮闘は続く。

開拓使札幌麦酒醸造所が初めてビールの製造に成功したのは、明治10年(1877)の5月中旬と思われる。2月に西郷隆盛が鹿児島で兵を挙げた後、動員されていた屯田大隊が九州で激戦を展開していた頃である。

最初に東京に届けられたビールは、内圧により途中でコルクが抜け、中身が噴き出して瓶の中のビールが一滴も残っていなかったという「事件」もあった。

肝心のビールの味はどうだったのか、外国人のいくつかの評価の声が伝えられている。

「ビールの色は鮮麗で光輝いているが、やがて赤味を帯び、若干の時間がたつと泡が徐々に上昇する。苦みもよいし、なによりも2回にわたって覚える芳香はもっとも愉快である」(ペンハロー)

「札幌で醸造された冷製ビールは実に良好で、完全と言える。横浜醸造所のビールよりはるかに良くなっている」(コルセルト)

いよいよ商品化の時である。最初の開拓使ビールは9月に販売された。10月にはラベルが完成した。勸業課の職員たちの力作である。

「冷製札幌麦酒」の認知度が次第に上がる中、醸造所のそばに広大なホップ園が設けられた。輸送にも改善がなされ、明治13年醸造所の増築により生産量は2倍となった。

明治14年、東京・上野で2回目の内国勸業博覧会が開催され、初出品の「冷製札幌麦酒」は有功賞を受賞した。

ビール生産が軌道に乗り始めたさなか、村橋は突然開拓使に辞表を提出した。



第1号ラベルの原図

6. 放浪、そして死

開拓使廃止の前年の明治 14 年、村橋は突然辞表を提出して行脚放浪の旅へ出る。そして 11 年後……。

明治 5 年から 10 ヶ年計画で始まった北海道開拓は、計画期限満了と共に廃止が予定されていた開拓使の継続を主張した黒田の願いもかなわず、廃止が決定した。もともと苦しい財政状況は、西南戦争で膨大な戦費を費やしたことによりさらに悪化していた。

廃止にあたり明治 13 年 11 月、政府は殖産興業政策のもと設立した工場などの官有物の民間への払い下げを公示した。翌 14 年、事業の継続を図りたかった黒田は、破格の安値で同郷の部下を通じ同郷の五代友厚らに払い下げようとした。このもくろみを「薩摩閥の官財癒着」として新聞にすっぱ抜かれ、一大スキャンダルとなった。

村橋が突然辞表を出し開拓使を去ったのは、この事件の直前の明治 14 年 5 月のことであった。

村橋の憤りと失望は想像に難くない。燃えるような情熱を注いで築き上げてきた数々の事業と施設を、維新で成り上がった政治家や商人、そして官僚が食い物にしている現実絶望したことだろう。

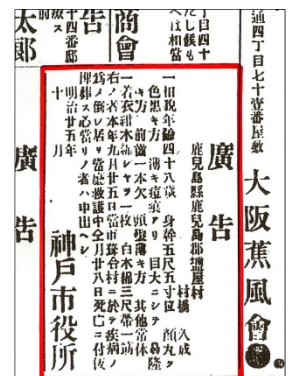
同僚や部下達の慰留を振り切って、村橋は行脚放浪の旅へ出た。その後村橋の消息は途絶える。

11 年後の明治 25 年(1892)10 月 12 日、神戸又新日報に死亡広告が掲載された。

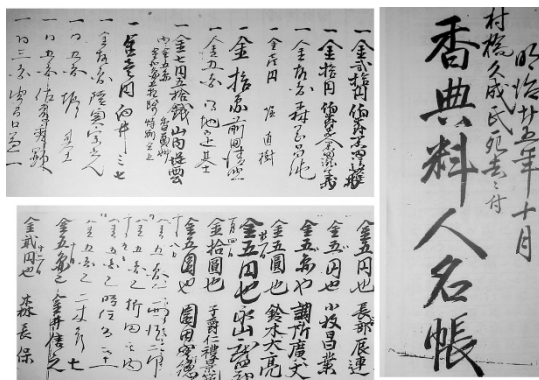
「9 月 25 日、神戸市郊外の路上で疾病のため倒れていたのを発見して救護をしていたが、同月 28 日に死亡した。心当たりの者は申し出でよ」

発見された時、着衣は木綿シャツ 1 枚と白木綿三尺帯 1 本だけのほとんど裸の状態、施療院に収容されたが「鹿児島県士族、村橋久成」とだけ言い残して息絶えたということであった。

翌日、村橋の壮絶な死を知った黒田清隆や湯地定基、佐藤秀顕、堀基、永山武四郎、調所広丈ら元開拓使の旧友たちによって葬儀が営まれ、青山霊園に墓が建てられた。



村橋の死を報せる死亡広告



残されている葬儀時の「香典料人名帳」の一部

筆頭には、自筆で伯爵黒田清隆(逓信大臣)と夫人瀧子、続いて森岡昌純(日本郵船社長)、山内堤雲(鹿児島県知事)、湯地定基(貴族院議員)、陸奥宗光(外務大臣)、堀基(前北海道炭礦鉄道社長)、佐藤秀顕(逓信大臣秘書官)、長谷部辰連(貴族院議員)、小牧昌業(奈良県知事)、調所広文(鳥取県知事)、鈴木大亮(逓信次官)、永山武四郎(屯田司令官)、仁礼景範(海軍大臣)……と続く

7. 村橋久成年譜

作家・田中和夫氏の手による
村橋久成 53 年の軌跡。

天保 13 年(1842)

10・中 薩摩藩加治木島津家一門村橋久柄の嫡子として出生。昇介と命名(のち直衛、久成と改名)

嘉永元年(1848)

3.28 琉球着任を命じられた父、久柄をのせた船が破船、遭難。行方不明となる。わずか 6 歳にして家督を相続することになる

元治元年(1864)

11・中 薩摩藩庁において英国留学生派遣を決定

慶応元年(1865)

1.19 英国留学への藩命下る

1.20 鹿児島城下を出発。翌 21 日、串木野郷羽島浦に到着。密出国のため変名(橋直輔)を使用

3.22 村橋ら留学生一行、グラバー商会のオースタライエン号に乗船し、羽島浦を発つ

3.26 香港到着

4.12 シンガポール到着

5.15 スエズ到着

5.28 英国サザンプトン港到着。同日夜ロンドン到着

6.7 専攻科目を海軍学術から陸軍学術に変更

8・中 ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの法文学部に入学

慶応2年(1866)

3.28 松木弘安とともに帰国の途につく

5.24 鹿児島に到着

慶応3年(1867)

10.13~14 薩長両藩に討幕の密勅下る。徳川慶喜、大政奉還

慶応4年(1868)

5.5 弟宗之丞、薩摩藩小銃十番隊小頭見習として長岡戦に出軍

6.14 弟宗之丞、長岡にて戦死

7.16 加治木大砲隊監軍として鹿児島出発

8.24 越後松ヶ崎に上陸

9.9 松ヶ崎出発、新発田、米沢、上ノ山を経て山形に向かう

10・中 越後村上に滞陣

12.6 新発田、会津を経て東京へ入る

明治2年(1869)

3.8 箱館出兵のため品川から軍艦春日にて青森へ向かう

3.25 宮古港にて旧幕府軍艦回天と海戦

3.27 青森到着。旧幕軍征討青森口鎮撫総督府軍監となる

4.16 江差上陸。二股口の官軍の指揮をとる

5.11 箱館市街を制圧

5.12 箱館病院に会津藩遊撃隊長・諏訪常吉を見舞い、病院長高松凌雲を通じて榎本武揚に恭順を勧告

5.16 千代ヶ岱陣屋を攻撃

5.18 五稜郭落ち、旧幕府軍降伏。榎本らの恭順に立ち合う

5.21 蝦夷地平定。軍監を免ぜられる

6.1 東京帰着

7.4 嫡子亀千代、死亡(2歳)

7.14 鹿児島帰着

9.14 賊軍追討の戦功により金400両の賞典を下賜される

明治3年(1870)

5.9 黒田清隆、樺太専任の開拓次官となる

10.10 開拓使東京出張所を芝増上寺に置く

明治4年(1871)

11.28 開拓使採用。十等出仕、東京出張所在勤

明治5年(1872)

6.3 九等出仕に昇格

8.25 開拓権大主典となる。東京三官園担当となる

明治6年(1873)

5.25 開拓大主典となる。農業課担当。宿所は東京第二大区小六区芝栄町一番地

12.22 農業課七重村官園(旧七重開墾場、のち七重(現、七飯)勸業試験場と改称)在勤

明治7年(1874)

1.9 札幌殖民地(屯田兵村地)取調べを命ぜられる

3・中 七重村官園300万坪の全地測量と畑地の区画を終了

3.27 札幌殖民地取調べのため函館(七重村)出発

4.5 札幌到着

4・中 屯田兵の入殖地を琴似村に決定し、200戸の兵屋建築のため同地域の伐木と測量、地区割り作業を実施

4.23 石狩川上流の石炭山調査のため札幌を出発

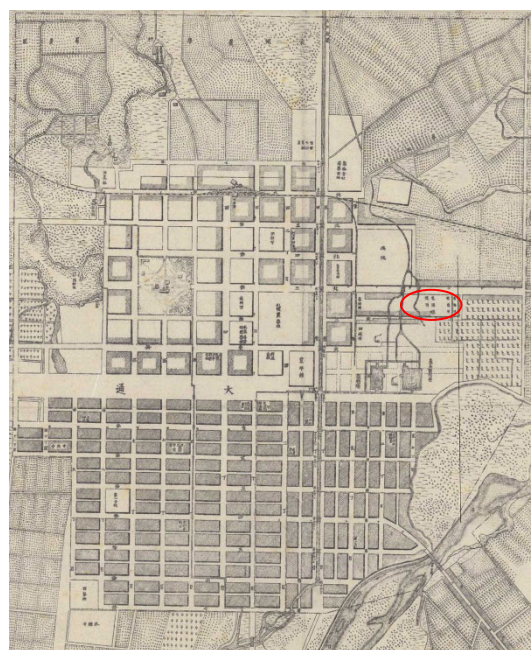
- 4.30 札幌帰着
- 5.4 札幌殖民地取調べを終えて、札幌を出発
- 5.5～10 室蘭到着。室蘭殖民地(屯田兵村地)取調べ
- 5.11 函館帰着
- 5.17 屯田兵村着手報告のため函館出発
- 5.20 東京到着
- 6・中 屯田兵事務を担当
- 7.18 函館七重村帰任のため東京出発
- 7.8～8.5 屯田兵村授産用桑の苗木購入のため栃木県、置賜県(山形県)に立ち寄り、七重村に帰着
- 11.28 琴似兵村に 208 戸の兵屋落成

明治8年(1875)

- 2.4 東京出張所農業課在勤となる
- 4.20 開拓使七等出仕(奏任官)となる
- 6.10 勸農本局を本庁に設けるなど勸農機構の改正を求める「勸農着手順序ノ義」の稟議書を上局に提出
- 8.14 北海道物産縦覧所(のち、仮博物場と改称)事務管理を命ぜられる
- 8.30 ドイツ帰りの麦酒醸造人・中川清兵衛を雇用し、雇用期間中は辞職は相ならぬという内容の誓約書を提出させる。麦酒醸造所建設見積書、麦酒製造入用品見積書を上局に提出
- 11.11 次男、圭二誕生
- 12.25 麦酒醸造所、北海道建設の稟議書を上局に提出
- 12.28 麦酒醸造入用品、横浜到着

明治9年(1876)

- 2.25 麦酒醸造所北海道建設を促す稟議書を再提出。
北海道実地建設までの仮払い稟議書を提出
- 2.28 麦酒醸造所北海道建設稟議、裁可
- 2.29 麦酒・葡萄酒醸造所、札幌製糸所建設の指令下
る
- 4.7 三所建設のため、札幌在勤となる
- 5.27 牧畜技師エドウィン・ダン、招募清国人、工部省赤
羽製作所職工ら 30 名を同行し、東京出発
- 6.1 札幌到着
- 6.27 麦酒醸造所建築着手
- 8.2 鹿児島島の祖母、死去
- 8.6 本庁物産局製煉課在勤となる
- 8.13 札幌製糸場建物落成



札幌市街之図(明治 22 年)(一部) 赤丸が麦酒醸造所

- 8.17 麦酒・葡萄酒醸造所建物落成
- 8.30 札幌葡萄酒醸造所竣工
- 9.8 札幌麦酒醸造所竣工
- 9.8 麦酒醸造に着手
- 9.23 麦酒醸造所、葡萄酒醸造所、製糸所開業式
- 10.8 麦酒製造見習い人選抜のため有珠郡紋別村へ出張
- 10.30 東京出張所在勤を命ぜられる
- 11.15 札幌出発
- 11.19 東京到着

明治 10 年(1877)

- 1.23 職官改正によって開拓権少書記官となる。宿所、東京芝山内三島谷 19 番地
- 1.25 麦酒製造雇、中川清兵衛の 24 ヶ月雇継ぎの稟議書を上局に提出
- 2.7 札幌から輸送の麦酒貯蔵のため、氷販売業中川嘉兵衛の氷室借用の稟議書を上局に提出。箱崎官用地に北海道物産売捌所建築を稟議
- 4.18 正七位に叙せられる
- 6.23 札幌産の麦酒と葡萄酒、箱崎官用地船着場に荷揚げされ、中川の氷室へ搬入。皇太后、その他大官諸侯公に献上
- 9.11 読売新聞に札幌製麦酒の広告を掲載
- 11.26 札幌在勤を命ぜられる
- 12.24 東京・箱崎官用地内に北海道物産売捌所ならびに麦酒蔵建築を再稟談。裁可される

明治 11 年(1878)

- 6.7 幌本庁民事局副長に任ぜられる
- 10.6 札幌農学校演武場(のちの時計台)新築なり、生徒分列式を観閲
- 11.24 綿羊飼育調査のためエドウィン・ダンを伴って七重勸業試験場へ出張
- 12.2 調所民事局長、黒田長官随行員としてコルサコフ出張のため、民事局長代行

明治 12 年(1879)

- 1.17 病氣療養のため 1 ヶ月間の予定で熱海温泉へ出発
- 2.15 熱海療養を終え着京。そのまま東京滞在
- 4.8 東京出張所在勤となり、勸業課長に任ぜられる
- 4.12 丘珠村入地の招募清国人、許士泰、范永吉を帰化させ、開拓使平民に入籍させる

明治 13 年(1880)

- 5.13 進退伺を黒田長官に提出。品川・高崎間の鉄道線路測量のため、工部省官員による二号試験場内の無断伐木によって平常の監督不行届を自省。却下
- 6.9 東京出張所勸業試験場長に任ぜられる
- 6.18 五代友厚大阪商法会議所会頭からの書簡を受領(勸業課取調の物産商業上に関する報告書類

は細大洩らさずに差回されたし、との要請書)

- 11.5 工場払い下げ概則によって、一号、二号の勸業試験場を、一般入札法による払い下げ処分を公示

明治 14 年(1881)

- 5.4 開拓使を辞職
- 5.11 「奉職中職務格別勉励」につき慰労金 200 円下賜
- 6・中 東京出張所廃止。事務を札幌本庁に移す
- 7.27 黒田長官、北海道開拓使官有物払い下げを申請。一大政治スキャンダル巻き起こる
- 10.12 官有物払い下げ中止。国会開設の勅諭(明治 14 年の政変)

明治 15 年(1882)

- 2.8 開拓使廃止に伴い、慰労金 350 円下賜

明治 18 年(1885)

- 10.26 母、須賀死去

明治 25 年(1892)

- 9.25 神戸市葺合村において行路病人として救護を受ける
- 9.28 死亡。仮埋葬。享年 53 歳
- 10.10 「神戸又新日報」に行旅死亡の広告掲載
- 10.18 新聞「日本」の雑誌欄に「英土の末路」掲載
- 10.20 新聞「日本」の投稿欄に旧友から寄せられた弔文掲載。旧友の連名で葬儀開催の呼びかけ文各地に発信される
- 10.23 青山墓地にて黒田清隆ら参列のもと、葬儀とりおこなわれる

(田中和夫編)

8. 薩摩藩英国留学生記念館

留学生たちが英国へと旅立った「黎明の地」に建つ。

(記念館ホームページより)



記念館建設の経緯

元治 2 年(1865)4 月、19 名の若き薩摩藩士が密かに英国へと旅立ちました。命がけで密航に臨んだ薩摩スチューデントたちは広く世界を見聞し、新しい文明をもたらし、さまざまな分野で日本の近代化に貢献しました。彼らが決死の思いで密航に臨んだ羽島は「黎明の地」として語り継がれ、平成元年から毎年 4 月に地元住民が中心となって「黎明祭」を開催。彼らの偉業を偲び、顕彰しています。

近年、日本の近代化に関わる史跡や歴史エピソードが注目を集め、幕末・近代の歴史に注目が集まってきました。薩摩藩英国留学生についても早くからその資料を収集展示し、偉業を紹介するミュージアムが必要であると見識ある方々が提唱されていましたが、2015 年の留学生渡欧 150 周年を前ににわかにその気運が高まり、本館設立の具体化が決定いたしました。

開館までの取り組み

平成 21 年度：留学生関連資料収集

平成 22 年度：基本構想、基本計画、留学生関連資料収集

平成 23 年度：基本設計(建築・展示)、留学生関連資料収集(米国カリフォルニア等)

羽島ナイト開始【地元有志が集い、魅力ある素材(人、食、風土、文化)やその活かし方、コミュニティデザインについて語り合うサロン】

平成 24 年度:建築実施設計、展示実施設計、運営計画、留学生関連資料収集(英国等)

平成 25 年度:新築工事着工・完成(7 月～3 月)

留学生関連資料収集(米国カリフォルニア等)

建築に託した意味と素材

■レンガ・石・木の使用

建物外観は南九州で焼かれた火山灰煉瓦を一つ一つ積み上げたものです。白目地で上品に仕上げたイギリス積み。また、側面に地元の羽島石を積み上げた擁壁を採用。ライブラリーの床には鹿児島島の溶結凝灰岩を市松に敷きました。館の内外に木を使っています。



■和瓦屋根と漆喰留め

幕末以降に造られた西洋式の近代建築でも鹿児島では和瓦葺きがほとんどでした。台風の多い鹿児島では瓦の上から白漆喰でしっかりと固定する技術が普及。本館も同じ方法で屋根を葺いています。鬼瓦や棧瓦には館のシンボルである星形があしらってあります。

■木製デッキ・マスト

海に臨む素晴らしい環境を活かし、留学生の乗った機帆船をモチーフに本物の木製マスト付きの甲板デッキを設置。床面はチーク材を船舶用の技法で貼りました。ここから留学生出発の瀬を展望できます。



■インテリア・フローリング・ベンガラ色

館内カフェの壁面は鹿児島の武家住宅を意識したベンガラ色に仕上げました。フローリングの一部には英国風のヘリンボーン貼りで短尺のナラ無垢材を敷き詰め、低コストでも本物の素材が使えることを実証しています。